# 序章　研究の視点と方法

## 第一節　研究の立場と範囲

当為表現（前項部～ネバ、～ナケレバ、後項部ナラナイ、イケナイ）は一つの表現形式でありながら、否定助辞の条件表現と禁止表現という二つの表現が合成された特殊な表現形式[注1]である。ところが従来の研究では、当為表現は否定表現の一形式として、あるいは当為表現のみ扱われており、形式の変化はある程度明らかになったものの、他の表現との比較が課題として残されていた。両表現の比較により、当為表現の特質がさらに明らかになると考える。そのため、本書は否定助辞の条件表現、禁止表現との比較・対照を行い、先行研究では解明されなかった点に迫ろうとするものである。

対象とする時代は、近世以降とする。それは、後述するように標準語（共通語）の成り立ちを考えるうえで、さまざまな位相を検証できる資料がこの時代から多数残されているからである。

従来の近世語の研究は、資料の関係により、前期は上方語、後期になると江戸語も加わった東西二大方言について行われてきた。これらの中央語はそれぞれの地域と時代を代表するものとして重要であり、日本語史を考えていく本流をなすものである。

ところが江戸語の成り立ちについては諸説あり、現在でも活発に論じられている。近世（江戸時代）は徳川家康の江戸幕府開幕にはじまるが、その後もしばらくは政治の中心地は江戸、文化の中心地は上方という時代が続いた。江戸を中心とした文化が栄えるのは開幕から約一七〇年後のことである。ことば

も同様に、江戸語は地方より流入してきた人々の方言雑居の状態からその当時共通語であった上方語を基盤に東国語が入り、融合混和して徐々に形成されたもので、その一応の成立は中期頃といわれている。[注2]

また、近世は士農工商に代表されるような身分制度が確立し、身分の違いによることばの相違が顕著であった。例えば、武士あるいは上層町人のような教養ある人々、職人や下層町人等の比較的教養の低い人々、その他、遊里やいさみ等の特定の集団に使われたことばがあり、身分の違いによることばの相違が明確であった。

このように、江戸語は地域や身分によることばの相違を生み出した。ことばの多様化が江戸語の大きな特徴といえよう。

以上のように、近世語に関しては、上方語、江戸語の比較・検証、さらに位相等の考察が不可欠なのである。

しかし、周辺には多くの方言が存在しており、現在も存在する。日本語の歴史を考えるとき、主要な中央語とその周辺にある諸方言とが共存して各時代の言語を形成しており、それらを時代的につなぎ合わせたものが日本語の歴史であると考える立場もある。この考え方に立てば、中央語と地方の方言が地理的・文化的にどのように影響を与えていたのか、その関係がどのように展開してきたのかが問題になってくるであろう。

以上の考えから、本書では上方語、江戸語に加え、近世後期の尾張地方を舞台にした資料を用いた三地域の方言を扱う。尾張地方は東西方言の緩衝地帯に位置するため、上方語から江戸語へどのように連続していくのか、あるいは両中央語の影響をどのように受容したのかもあわせて考察を行う。

さらに、つづく近代も取りあげる。東京語の成立については大きくわけて二説出されている。第一は江戸語から変化を起こしてできたと考えるものであり、第二は教養層のことばを基盤として成立したとする考えである。[注3] この点に関しては、各研究者によりさまざまな指摘がなされており、議論が活発に行われている。そのため、近世からのつながりを考え、京阪語（関西語）・東京語の考察を行う。

ところで、明治時代に入ると、標準語（共通語）について活発に議論が行われるようになる。それは、それ以前の各地方において使用されていたことばを共通させ、国家の統一をはかることが急務であったことによる。この標準語（共通語）は、いずれも東京語と関連づけて論じられ、「東京の山の手の中流のことば」とか「東京の教養ある人々のことば」と考えられたりしている。このように標準語（共通語）は、東京語を基盤にして成立したとされており、それは明治二〇年前後と考えられている。東京に基盤が置かれた理由は、近世以降、その政治形態により、政治・経済・文化・学問等の発信源として国内各地に大きな影響力を持っていたからであろう。明治期は西洋文化の流入に伴い、政治的・社会的に大きな変化が起こった時代であり、教育の普及、新聞・雑誌等の書物の普及により東京語を基調とする共通語が全国的に広まったとされている。

以上のように、標準語（共通語）の成り立ちは特定されていないが、標準語（共通語）普及に大きな役割を果たしたと考えられる国定教科書をみることにより、当時の言語意識を探ることにする。

さらにつづく現代語としては、二〇〇二年三月に『方言文法全国地図』（以下、ＧＡＪ）第五巻が刊行

され、当為表現における今日的な分布状況が俯瞰できるようになった。加えて、二〇一六年一二月に大西拓一郎編『新日本言語地図―分布図で見渡す方言の世界―』（以下、ＮＬＪ）が発行された。ＮＬＪは、国立国語研究所の共同プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査（研究代表者：大西拓一郎氏）」で、二〇一〇年から二〇一五年にかけて全国五五四地点において二一一の項目を調査している。ＧＡＪに続く今日的な様相が示されており、これらの分布から歴史（伝播）を推察し、また文献資料との比較・対照を行う。文献資料では中央語の歴史が主となっている。それに対し、ＧＡＪ・ＮＬＪは全国の分布が示され、文献のみでは推定しきれない諸地域の歴史を埋めるのに有効と考えるのである。

## 第二節　考察の手順

本書の第一章では、江戸語の様子を解明する。その際、当為表現だけでなく、関連する否定表現と比較し、当為表現の特質を明らかにする。さらに、話者の位相、および聞き手との関係でどのような形式を選択するのかについても論述する。

第二章では、江戸語・東京語における当為表現の様子とＧＡＪをはじめとする言語地図の分布を比較し、歴史的変化を推定する。

そして第三章は、近世後期から明治・大正にかけての上方語・関西語の当為表現後項部に関わる禁止表現を調査し、ＧＡＪの分布と比較・対照を行う。そして第一・二章の江戸語・東京語と比較し、東西二大中央語の実態を把握する。

第四章は、尾張地方の洒落本を資料に当地の様子を記述し、ＧＡＪをもとに史的変化を推定する。また、近隣中央語である上方語とも比較・対照し、影響関係を考察する。

第五章は、第四章とは異なる尾張戯作資料を用い、上方語・関西語資料を用いて行われた先行研究を参考に、当地の当為表現、禁止表現の様子を概観する。

第六章では、標準語（共通語）教育にもっとも影響があったとされる国定国語教科書を資料に当為表現の様子を概観する。これらと同時代の他文献とではどのような差異があるのかを比較し、当時の教科書の果たした役割を検証する。

第七章では、ＧＡＪ、ＮＬＪによる今日的な分布を解釈し、文献から得られた様子と比較し、変化の様子を推定する。

終章では近代日本語研究における中央語と方言についての見解および課題を述べる。

以上、この順に検証を行い、近代日本語における当為表現の様相を解明していく。

## 第三節　研究史

考察に先立ち、当為表現の先行研究についてひととおり眺めておく必要があろう。ところが、論文名に当為表現と冠した先行研究は少なく、従来は否定助辞表現の一形式として論じられる程度であった。